

縁神獸鏡は所有者にとって格段に重要な鏡ではなく、また「卑弥呼の鏡」であるとする説自体に対して、懷疑的な意見も軽視できない状況である。

二 古墳時代の変遷

前期

三世紀末から四世紀にかけての前期は、古墳時代が始まり、急速に全国各地に前方後円墳を頂点とする古墳文化が広がる時期である。

弥生時代終末の首長墓をみると、西日本各地は地方ごとに独自の形態の墓を作りだしていた。中国地方東南部の吉備では方形ないし円形に土盛りした墳丘墓が築造され、岡山県楯築^{たてつき}弥生墳丘墓では円丘の両側に突出部を持ち、全長約八〇^{ドル}に達すると推定されている。一方中国山地から日本海側の出雲を中心とした地方では、方形の墳丘の四隅に突出部をつけ、墳丘全体に張り石をする四隅突出型弥生墳丘墓が築造される。

また、北部九州では方形周溝墓や墳丘墓が造られる。このように古墳時代の前段階には、かなり広い範囲を単位として、地域的な結束ができていた。そして、これらの各地方の独自性を取り入れつつ、前方後円墳という共通の祭祀形態を作りだしたのが畿内の有力首長たちであった。畿内政権として誕生した支配体制は、畿内の各平野や盆地を統合した有力首長のなかで、特に強力な支配力を持つ首長（大王）のもとに形成された体制であったと考えられる。そしてこの前方後円墳による祭祀は、最終的には岩手県南部から鹿児島県まで広がっていく。

前期の古墳

箸墓古墳は前期のなかでもごく初期の代表的な前方後円墳である。墳丘は全長二七六メートルで、前方部の先端部は「撥形」（ぼちかた）に開く特徴を持つ。やや下位の首長になると、前方後方墳を築造する。岡山市備前車塚古墳は丘陵頂上部に造られた前方後方墳で、全長が四八メートルとやや小形であるが、前方部は同様に「撥形」をなす。

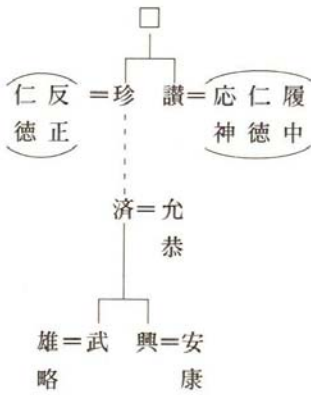
前期古墳の副葬品としては、四世紀後半の奈良県桜井市メスリ山古墳の出土品がよく知られている。この古墳は全長二三〇メートルを計る王の墳墓であり、儀仗を含む碧玉製品三一点・刀剣二本・鉄製槍先二二二点・銅鏃二二六六点・石鏃五〇点・鉄製工具一五〇点などが出土した。武器が多いことは、被葬者は武人としての性格が強い人物であることが推定される。更に、工具の多さは、高度な土木技術を背景に、被葬者が開発事業にも携わっていたことを示している。一方、祭祀的な色彩を持つ古墳としては、京都府山城町椿井大塚山古墳がある。この古墳は全長約一八〇メートルの前方後円墳で、大刀七点以上・剣十数点・鉄鏃二〇〇点以上、小札革綴冑（こざねかわじりかぶと）などの武器・武具のほか、農工具や漁具とともに、三角縁神獸鏡三二面以上が出土している。この時期の鏡は祭祀用具であるが、当古墳の三角縁神獸鏡の出土数は前期古墳のなかで最も多い。

中期

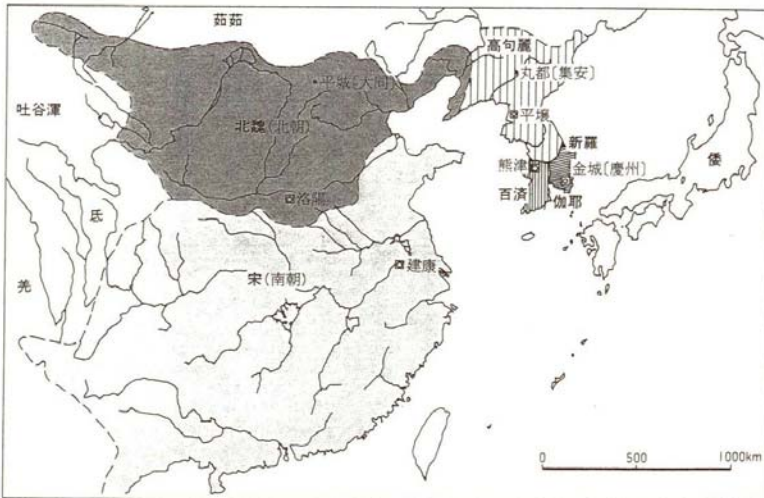
五世紀代になると、畿内の大王は大陸や朝鮮半島と交流を深めながら、新しい技術や文化を取り入れようとした。また、中国の歴代皇帝に朝貢して、その權威を後ろ盾としながら、国内の地方豪族に対する支配体制を固めていった。

中国の歴史書『宋書倭国伝』によると、この時期の倭王として、讚・珍・濟・興・武の名前があげられている。これら「倭の五王」（第4図参照）のうち、武は「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国

諸軍事、安東大將軍、倭王」と、朝鮮半島や日本の軍
 政官の称号を与えられた。当時、朝鮮半島は北部の高
 句麗くわりのと南部の新羅・百濟くだら・伽耶諸国かやとに分かれており
 (第3図参照)、倭は伽耶諸国や百濟と友好的関係にあ
 った。このような朝鮮半島での地位を確立しようとし
 た理由は、倭王たちが朝鮮半島に産する鉄資源に特に
 強い興味を持っていたためである。この時期、織物・
 金工・土木・須恵器生産や漢字の使用などの技術・文
 化が、大陸や半島からもたらされた。



第4図 倭の五王と日本書紀の天皇
 宋書記載の各倭王と日本書紀の各天皇
 を対照。讚・珍についてはそれぞれ括
 弧内の各天皇に比定する説がある。



第3図 五世紀の東アジア (白石太郎氏原図)

中期の古墳

畿内では大王級の古墳は、四世紀代には奈良盆地に営まれるが、五世紀に入ると河内平野に多く築造されるようになる。この現象の解釈については、大王権力の根拠地が移動したとする考え方と、最高首長の根拠地は常に大和にあり、墳墓の場所だけ移動させたとする考え方がある。

五世紀の前方後円墳は、後円部に比べ前方部の発達著しく、全体の規模も古墳時代を通じて最大になる。大阪府堺市大仙陵（仁徳陵）古墳は全長四八六メートル、大阪府羽曳野市誉田御陵山（応神陵）古墳は全長四二五メートルを計る。これら大王墓以外でも、岡山市造山古墳（全長三三〇メートル）・岡山県総社市作山古墳（二八六メートル）など、地方豪族も巨大な前方後円墳を築造する。その背景には、高度な土木技術の存在が不可欠であり、古墳の周濠にたたえられた水は、開発が進みつつあった新田の農業用水として利用された。

古墳の埋葬主体部は、前期に続き堅穴式石室や粘土槨が主流で、槨は割竹形木槨・組合式木槨に加え割竹形石槨・長持形石槨などの石槨の使用が増加する。副葬品では鏡が減少し祭祀的傾向がしだいに薄れてきて、武器や農具などの実用品が増加する。武器・武具では、鉄剣に代わって鉄刀が多くなり、鉄鏃は長頸鏃に変化する。埼玉県行田市稲荷山古墳や熊本県菊水町江田船山古墳などからは銘文を持つ鉄剣や鉄刀が出土している。甲冑では短甲や衝角付冑に加えて、眉庇付冑が出現する。装身具では金銅製帯金具や金銅製耳飾りなど、金製品や金銅製品が現れる。また、新しい副葬品には馬具や陶質土器・須恵器がある。埴輪では、人物や器材をかたどったものが増える。

後期

六世紀はまさに内憂外患の時代である。「倭の五王」と呼ばれた大王は、四七九年に雄略が没したのち、大和政権内部に後継者がなく、地方豪族は急速に勢力を強めていった。五二一

七年に朝鮮半島進出をめぐって北部九州に君臨する筑紫君磐井が新羅と結んで乱を起こし、『日本書紀』には雄略の子星川皇子による吉備での乱が伝えられている。五〇七年の大王武烈の死後、雄略の子孫と称して越前から継体が大王として迎えられた。継体の治世中には大和政権は朝鮮半島経営をめぐっても危機に直面していた。半島では高句麗・新羅・百済の三国が覇権を争い、伽耶諸国が争乱に巻き込まれていた。大和政権は内部抗争などから伽耶諸国での支配力が弱まり、五一二年には百済の要求により伽耶西部の四県が割讓された。また、筑紫君磐井の乱が鎮定されたのち、新羅に奪われていた伽耶を復興するため半島に兵を派遣するが、敗退し、大和政権は半島での足場を失ってしまった。

継体の死後、政権を支えてきた畿内の有力豪族の対立は深まり、継体天皇を擁立した大伴金村は伽耶の四県割讓問題で大連を辞任し、大伴氏は後退した。また、五世紀前半に伝来した仏教の受容をめぐって崇仏論争が起き、崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏が激しく対立した。五八七年用明天皇の死後、蘇我馬子は武力で物部守屋を滅ぼし、五九二年には自ら立てた崇峻天皇までも殺害してしまった。

このように、六世紀代は大伴・物部・蘇我などの大和政権内部の有力豪族がその地位を高め、天皇を自ら擁立し、逆に暗殺するまでに勢力を拡大した時期である。また、大和政権下の豪族の地位は、大臣・大連などの新しく設けられた氏姓制度によって位置づけられた。

後期の古墳

この時期の前半には前方後円墳がまだ盛んに築造される。奈良県橿原市見瀬丸山古墳（全長三二八メートル）・大阪府高槻市今城塚古墳（継体陵、全長一九〇メートル）などの前方後円墳があるが、総じて中期に比べ小型化している。一方、有力豪族の支配下にあったいわゆる家父長層も力をつけ、五世紀後

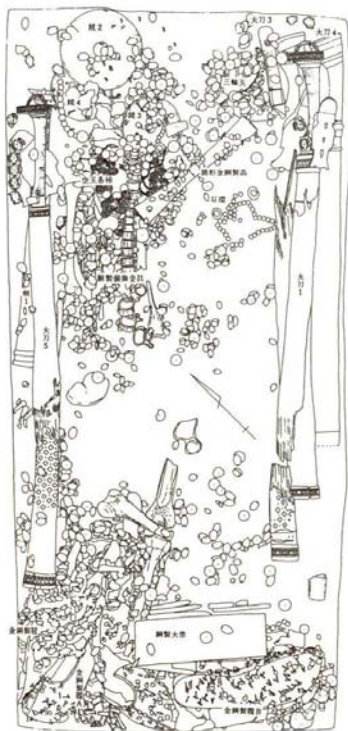
第4章 古墳時代

半以降、中小の古墳を築造するようになる。この中小の古墳は密集して造られていることから、群集墳と呼ばれている。

古墳の内部主体は、竪穴式石室に代わり複数の埋葬が可能な横穴式石室へと変わる。大型の古墳の玄室内には家形石棺が安置される場合が多い。

副葬品のうち、大刀は単龍・双龍などの環頭大刀や頭椎大刀・圭頭大刀のような装飾化が進む。馬具は六世紀前半には五世紀代の金銅製鞍金具や杏葉などの飾り金具がつくものに代わって、素環鏡板付轡と木製の鞍に、木製壺鍔という簡素の装備になる。装身具では五世紀後半に出現した冠や垂飾付き耳飾り・飾履が変化を遂げながら使用されている。更に、供献土器として須恵器が多量に副葬されるのもこの時期である。奈良県斑鳩町藤ノ木古墳は六世紀後半の円墳であるが、横穴式石室内部の家形石棺からは、二体の成人

男性とともに豪華な副葬品が発見された(第5図)。その内容は、環状乳文文帝神獸鏡一面・神獸鏡二面・獸帯鏡一面と大刀五振り・剣一振りなどである。また、被葬者は頭に一万個以上のガラス小玉で作った帽子をかぶり、ガラス玉を連ねた玉簾



第5図 奈良県藤ノ木古墳遺物出土状況

状の装束をまとい、鍍金銀製うつつろ空玉くわむすなどの金属製首飾りや鍍金銀製耳環・銀製垂飾髪飾りなどで飾られ、金銅製履をはいていた。更に、足元には金銅製冠や銅製大帯が置かれていた。

終末期

聖徳太子は六〇三年の冠位十二階によって官吏の位階を細かく定め、六〇四年には憲法十七条を發布して、中央・地方の官吏の服務などを規定した。その後、蘇我氏が再び台頭し、入鹿かが山背大兄王やまののちぢあひを自殺に追い込むに至って、中大兄皇子なかのちぢあひの（後の天智天皇）・中臣鎌足なかつらのかまたりらは皇室中心の強力な国家体制を目指し、入鹿・蝦夷あまら蘇我氏を滅ぼし、六四五年に大化の改新を興した。そして翌年に改新の詔を出し、公地公民制や班田制・租税制度などからなる中央集権的な新政を開始した。更に、天智天皇は六

六八年に近江令を制定し、六七〇年には庚午年籍こうごんねんじやくを作製した。その後、六七二年の壬申の乱に勝利した大海人皇子あまのは、天武天皇として即位し、六八四年に八色の姓かばねを制定し、律令国家の基礎がほぼ完成した。

この間、対外的には遣隋使けんずいし・遣唐使が派遣され、中国の進んだ技術・文化が積極的に取り入れられ、仏教が興隆し、飛鳥あすか・白鳳文化はくほうが花開いた。一方、唐・新羅連合軍に侵略された百済を復興するための朝鮮半島に兵を派遣した大和政権は、六六三年に白村江はくすみのえの海戦で連合軍に敗北した。

終末期の古墳

終末期の七世紀には、前方後円墳は関東の一部を除き築造されなくなる。これは、当初前方後円墳の築造が持っていた大和政権内での地位や首長権の継承儀礼などの意義が薄れてきたことが一つの要因であり、また仏教が浸透するにつれて中央や地方の豪族が古墳築造に費やしていた労力を寺院の建立へと向けた結果でもある。終末期の古墳は円墳・方墳などで、墳丘の規模も非常に小さくなっている。方墳は大坂府用明天皇陵古墳（一辺六五メートル）、大坂府推古天皇陵古墳（長さ一〇〇メートル、幅七五メートル）、

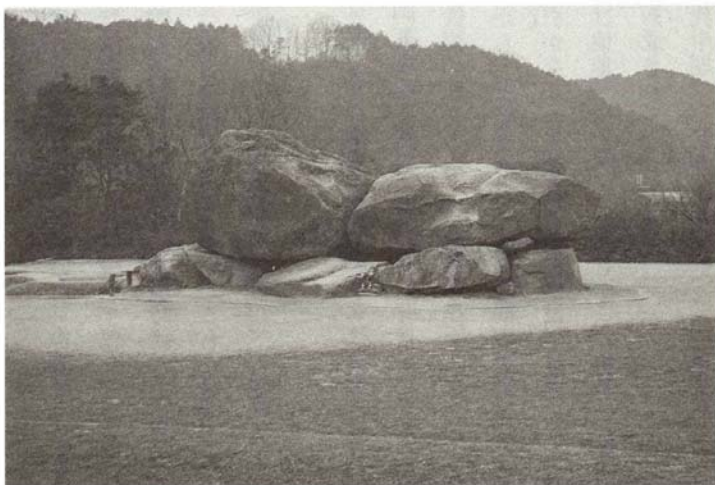
第4章 古墳時代

蘇我馬子の墓といわれる奈良県石舞台古墳（一辺五三メートル）（第6図）など、七世紀代前半の天皇や有力豪族の墓に採用されている。ただし、家父長層らによる群集墳はこの時期も継続して営まれていた。七世紀後半になると舒明天皇陵・天智天皇陵・天武天皇陵など天皇だけは八角形の墳墓を造っている。

石舞台古墳は、全長一九・〇メートルに達する巨大な横穴式石室で、玄室の天井石は長さ五・二メートル、幅四・三メートルで重量は約七七トの巨石を使用している。また、横穴式石室に代わって畿内を中心に横口式石槨が採用されるときともに、夾紵棺きょうちゆうこや漆塗木棺など持ち運びが容易な新しい棺が作られるようになる。

三 生産と流通

古墳時代の始まりと前後して、古墳を築造するために棺や外表施設の一部に新しい材料が使用され、また五世紀代には須恵器をはじめとして中国や朝鮮半島から新しい技術が導入された。更に、六世紀代にかけて鉄や塩の



第6図 奈良県石舞台古墳